

# 文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
平成二十二年十一月一日発行(毎月一日発行)  
第八十八巻第十三号(十月九日発行)

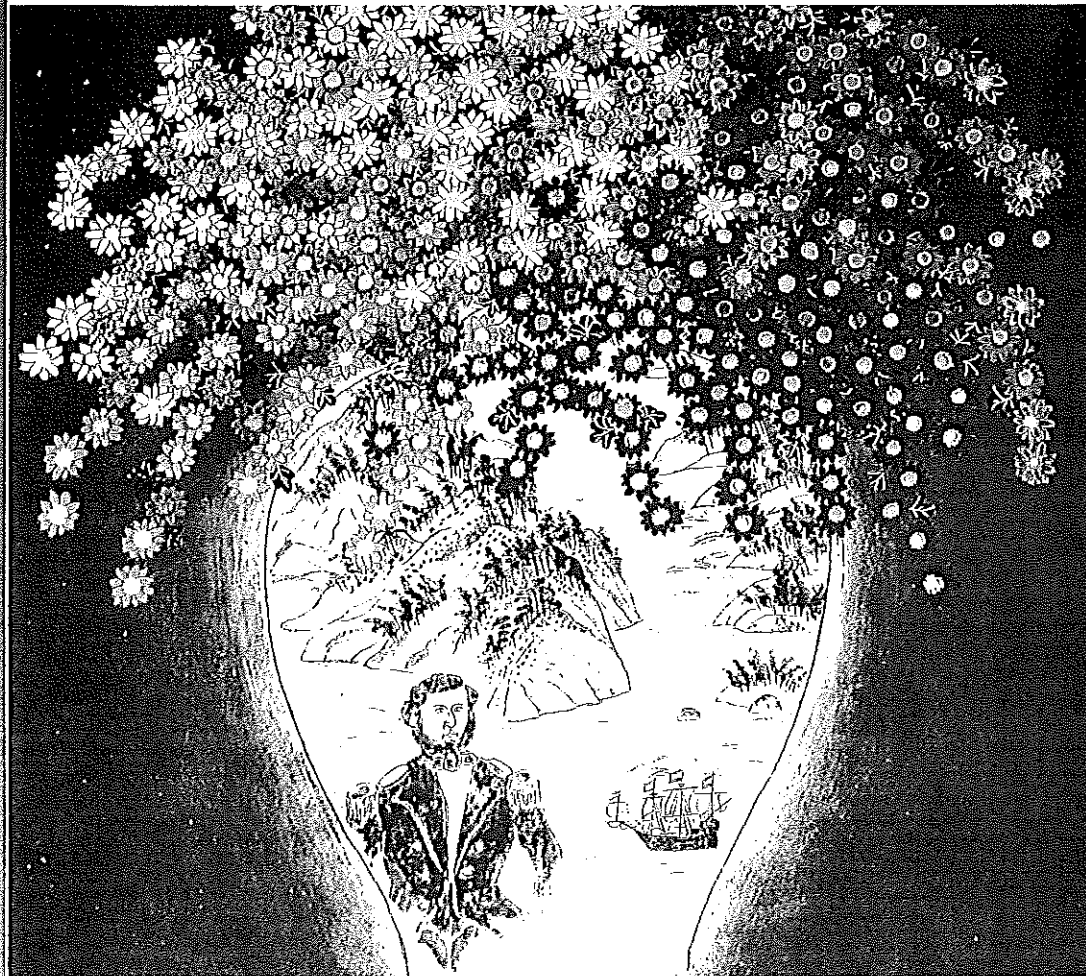
大型  
特集

## 医療の常識を疑え

近藤 誠  
仁科亜季子

「安心して  
死ねる病院」  
ベスト10

検察の罪と罰 村木事件の深層・足利事件の真犯人 十一月号




大型特集 医療の常識を打破せよ

# 月10万で完全介護 海外老人ホームで死ぬ選択

特養は入居数年待ち、有料老人ホームは手が出ない。ならいっそ海外へ

橘 玲 (作家)



トロピカル・パラダイス・ウレック  
マニラで暮らす有川英吉さん(左端)

リタイア後に海外に渡る高齢者が増えている。ロングステイ財団の調査によれば、海外で生活する日本人は五十歳以上で三十五・六万人、六十歳以上で十六・五万人と増加の一途で、昨今の円高で物価の安い海外生活への関心はますます高まっているという。「老後を海外で」という選択をした人たちはフィリピンを訪ねた。

衛兵の詰所のようなゲートをくぐる、兵舎の跡地を利用した工業団地が見えてくる。そこを抜ければあとは熱帯雨林の森が広がり、ゴルフ場の先にアーリーアメリカン調の平屋の住宅が並んでいる。芝生の前庭から道路標識

まで、なにもかもアメリカ郊外の住宅地にそっくりだが、それもそのはずで、ここはかつて米軍の将校宿舎だったのだ。

米国の戦略転換にともない、一九九二年、アジア最大規模を誇ったスービック海軍基地とクラーク空軍基地がフィリピンに返還された。マニラの北北西百キロ、天然の良港であるスービック湾に面した一帯はその後、経済特別区として開発されることになる。

この地域の最大の特徴は、旧米軍基地のインフラをそのまま利用していることだ。七カ所のゲートを除けば敷地は外界から隔離されていて、関係者以外は立ち入ることができない。その治

ト部美智子さん(八十三歳)は、二〇〇六年にこの地に移ってきた。夫である文磨氏が神戸で精神科医をしていたとき、フィリピン人看護師の日本への派遣に尽力したのが縁で、高橋社長の勧めもあり、夫婦の終の棲家をスービックに定めたのだ。広島で被爆した文磨氏には、気温が下がると喘息をひき起こす後遺症があり、それも亜熱帯の地への移住を決意した理由だったという。

「死ぬ瞬間」などの著作で知られる米国の精神科医エリザベス・キューブラー・ロスが、ひとはいかに死を受け入れるのかを考察し、ターミナルケア(終末介護)への道を拓いた。文磨氏はキューブラー・ロスと親交が深く、「死の受容」の哲学を日本に紹介した。肺がんの転移で脳と肝臓を侵された後、文磨氏はいっさいの延命治療を断り、二〇〇八年、ヴィレッジの自宅で静かに息を引き取った(享年八十)。美智子さんは、趣味人だった夫が自ら焼いた陶芸品に囲まれて、この

地で穏やかな日々を過ごしている。ヴィレッジを長期で利用する場合、一年のリースで介護費用込みの利用料は百三十二万円(月額相当十一万円)、十年リースでは九百万円(同七万五千円)。これに食費や光熱費が加わるから、毎月の生活費は十五〜二十万円になる。特別な介護が必要な場合は別途料金が加算されるが、それでも日本で介護保険適用外のサービスを受けるよりはるかに安い。

ヴィレッジの三組目の住人は、今年八月に入居したばかりの渡部ふみさん(九十一歳)だ。ふみさんは昨年十二月に重度の肺炎と診断され、もはや治療の方途はないと退院を促された。大正生まれのふみさんは外国大使館や外資系企業で長く働き、流暢に英語を話すモダンガールだった。六十歳を過ぎてからも行動力は衰えず、家族を日本に残して世界じゅうを旅して回った。自宅療養生活を始めたふみさんにとって、ホームヘルパーに子供扱いさ

安の良さは、昼間、どの家も玄関ドアを大きく開け放ち、風通しをよくしていることからわかる。殺人や強盗が日常茶飯事のマニラ市街と比べれば、森のなかののどかな生活はまるで別世界だ。

トロピカル・パラダイス・ヴィレッジは、スービックの旧将校宿舎二十七戸を改築した介護付有料老人ホームだ。創設者はN・T・トータルケア社(大阪)の高橋信行社長で、フィリピンで従業員千四百人を超える電子部品工場を経営するカタワラ、二〇〇三年、日本語を話すフィリピン人介護士を養成し、人手不足に悩む日本の老人介護施設に派遣する事業に乗り出した。ヴィレッジは、研修生たちの教育・実習の場でもある。

ヴィレッジには現在、三組の永住者がいる。日本から五年前に移住したのは高橋社長の両親で、九十九歳の宗一さん、八十八歳の泉美さん。ともにいまでも元気に暮らしている。

れるのは耐え難い屈辱だった。一人娘の啓子さん(六十歳)は母とヘルパーとのトラブルに翻弄され、一時は仕事を辞めることまで真剣に考えたという。そんなときふみさんが、「もう日本はいいから、どうせなら最後は大好きな海外で暮らしたい」と言い出した。そこで今年はじめに親子でヴィレッジを訪ね、ふみさんはそのまま二カ月ほど体験入居をした。いったん日本に帰ったものの、八月に入ると病状が悪化し、予定を早めてフィリピンに渡ることを決意。医師からは「生きてマニラ空港に降りられる保証はない」と言われたが、片道航空券で日本を後にした。ヴィレッジでは三人の若い介護士が交代で二十四時間付き添い、日本人看護師が容態を確認し、週に一、二回医師の往診も受けている。いまは病状も安定し、家の中を歩けるまでに体力も回復した。フィリピン人介護士の熱心な仕事ぶりにはなんの不満もないが、新鮮な刺身が食べられないことだけが

残念だという。

年金があれば簡単に移住可能

ここで、フィリピンでの高齢者介護の現状について簡単に述べておこう。  
この国の最大の特徴は、人件費の圧倒的な安さだ。中流以上の家庭は住み込みのメイドや子守（ヤヤ）を雇うのがふつうだが、その費用はマニラでも月額五千ペソ（約一万円）程度だ（食事は雇用主負担）。

フィリピン最大の産業は海外への出稼ぎで、半年の講習と二カ月程度の実習で資格を取得できる介護士が人気を集めている。大卒のフィリピン人はふつうに英語を話すから、言葉の問題がなく、永住権や市民権が取れるアメリカやカナダが彼らの第一目標だ。

しかし最近では、欧米諸国も外国人介護士の受入れを制限しはじめており、フィリピン国内には仕事のない介護士があふれている。派遣会社に依頼しても、その費用は一日八時間勤務で

月額七千ペソ（約一万四千元）程度だ。プライベートナースも可能で、月額一万五千ペソ（約三万円）も出せばいくらでも応募が来る。月十万円、自宅で二十四時間完全看護（介護）が実現するのだ（個人の伝手で探せばもっと安くなる）。

誤解のないように言っておくと、これはけっして不当な搾取というわけではない。今年六月に大統領に就任したノイノイ・アキノが給与明細を公開して話題になったが、彼の月収は手取り六万三千ペソ（約十二万六千元）だった。大統領職の報酬がこの金額なのだから、政府高官や警察幹部でも月収はせいぜい八万円程度。ここから住居費や家族の生活費を支払えば、ほとんどなにも残らない（すなわち賄賂がなければ生きていけない）。それを考えれば、看護や介護はけっして悪い仕事ではないのだ。

周知のように、日本の介護施設はどこも人手不足に悩んでいる。特別養護老人ホームの待機者は全国で四十万人

を超え、有料老人ホームに入るには三千万円か入居一時金が必要だ。こうした現状を見れば、フィリピン介護士を日本に派遣したり、フィリピンに日本人高齢者のための介護施設をつくることにビジネスチャンスを見出す起業家が登場するのは当然だろう。

しかし現時点では、こうしたビジネスはどれも厚い壁にぶつかっている。

二〇〇六年のEPA（経済連携協定）締結を受けて、〇九年からの二年間で、フィリピンから四百人の看護師と六百人の介護士を受け入れることが決まった。だが日本の施設で働く外国人介護士は、給与など日本人と同等の労働条件を保障されるものの、三年後に介護福祉士の試験に合格することが継続滞在の条件とされている。この資格は日本人でも半分は落ちるといえるので、それを日本語で受験するのだから合格はほとんど望めない（EPAで来日したインドネシア人とフィリピン人の看護師候補者がひと足早く看護師試験を受験しているが、全体の合格率

が九〇パーセントにもかかわらず、二〇一〇年に受験した外国人二百五十四人のうち合格者はわずか三名だった）。

一方、受入れ側の介護施設としても、日本語のほとんど話せない外国人介護士を教育し、一人前に仕事ができるまで育てても、試験に合格しなければ帰国させなければならず、これでは徒勞以外のなにものでもない。資格の必要な看護師とちがって、日本人は介護福祉士の資格がなくても働いているのだから、外国人にのみ試験を課すのは国籍差別と批判されても仕方がない。EPAが外国人を長期で働かせないための制度だとわかって、当初の熱気はすっかり冷め、二年間で六百人という受入れ枠はいまだに半分程度しか埋まっていない。

フィリピンは一九八五年に退職庁（PRA）を設立し、海外の富裕な退職者の誘致に力を入れはじめた。五十歳以上なら、月額八百ドル（約六万八千円）（夫婦なら月額一千ドル）約八万五千円）を超える年金受給があるか、二

万ドル（約百七十万円）をフィリピン国内に定期預金することで更新不要の永住ビザが取得できる。日本人のロングステイヤーに人気のマレーシアは、期間十年の退職者ビザで三十五万リンギ（約一千万円）の財産証明が必要だから、これは破格に有利な条件だ。

年金受給年齢になれば、誰でも簡単にフィリピンに移住できる。だったら安価で豊富な労働力を利用して、フィリピン国内に日本人向けの老人介護施設をつくるのはどうだろうか。

だがこれも、実際はほとんどが失敗している。

マニラの南、火山湖で知られるタガイタイの近くに、ジムヤプールの完備したコンドミニウム形式の豪華な老人ホームが建設されたが、日本からの入居者がまったく集まらずいまだに無人のままだ。フィリピンの老人ホームの草分けとされる施設は、ホームと入居者のトラブルで日本人職員が全員退職してしまい、混乱が続いている。現在、日本人の入居者を募集している老

人介護施設はトロピカル・パラダイス・ヴィレッジのみだが、すでに述べたように、三組の入居者のうち二組は関係者だ。

「短期滞在者の増加で施設の維持費はなんとかまかなえるようになりましたが、初期投資はまったく回収できていません。私財を投じているだけ、と言われても仕方のない状況です」

ヴィレッジの創設者である高橋社長は、海外での介護事業の難しさをこう述べる。

「ほとんどの方は元気なうちに施設を見学に来て、いざれお世話になりますと言って帰っていきます。しかし実際に介護が必要になっても、家族の反対などでなかなか決心が付きません。逆に若年性認知症など、こちら側で受入れが困難なケースもありました」

海外の介護施設は、介護保険の適用外だ。日本では莫大な自己負担が必要で二十四時間完全看護・介護が低料金で実現できるとしても、それを活かせる機会は限られている。

日本の高齢者医療・介護制度は破綻必至で、福祉の貧困を恨むより、自らの意思で海を渡ったほうがずっとマシなケースも多いだろう。とはいえ、「超高齢化で、海外の介護施設に次々と日本人が押し寄せる」というのは夢物語にすぎなかった。

しかしその一方で、まったく違うルートでフィリピンにやってくる日本人高齢者たちがいる。

### 異国で「新しい家族」が

有川英吉さん（八十五歳）は、妻と早くに死別し、板橋区志村の2LDKのアパートで一人暮らしをしていた。朝起きるとテレビをつけ、買い物に行って食事をつくり、好きな本や雑誌を読み、夕食を食べながらテレビを見て、一日誰とも会話することなく、畳部屋に布団を敷いて寝る。そんな暮らしを二十年以上続けていてもとくに不満というものはなく、気がかりなのはアパートにエレベーターがないことく

らいで、明日は三階の自室まで階段を昇れるだろうか考えた。

一人息子の公一郎さん（五十七歳）はサーフィンが好きで、長年勤めたフアッションメーカーを四十八歳で早期退職し、青い海と輝く波を求めて海外に渡った。趣味で学んでいた整体を職にしようとして、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなどを転々とした後、フィリピンで当時二十四歳の女性と恋に落ち、結婚して三人の子どもが生まれた。

英吉さんは自分に孫ができたことは知っていたが、写真を見るだけで、とくに会いたいとは思わなかった。もともと飛行機が嫌い、海外旅行にも行ったことがないのだ。

二〇〇八年二月、英吉さんは突然のめまいに襲われて自宅で倒れた。そのまま半日ほど気を失い、意識が戻って自分で救急車を呼んだ。

入院中に、これまで感じたことのない不安が頭をもたげてきた。このまま日本で暮らすのが、怖ろしくなっ

たのだ。そのとき、帰国して病院に駆けつけた公一郎さんから、「こんなじゃいつ孤独死してもおかしくない。いっしょに暮らそう」と誘われた。

一カ月後、英吉さんは車椅子でマニラ空港に到着した。

公一郎さん一家は、マニラ郊外のゲートで仕切られた住宅地に二階建ての広い家を借りていた。そこに妻のシェリルさん（三十一歳）と双子の聖門くん（三歳）の三人の孫、それに住み込みのメイドと子守がいて、ときどきはシェリルさんの両親も泊まりにくる。

フィリピンでは、妻が夫の両親の世話をするのは当たり前だから、シェリルさんや実家のひとたちにとって、英吉さんが同居するのはごく自然なことだ。フィリピン語はもちろん英語すら話せず、日常生活に介護が必要でも、ここでは家族の一員として歓迎される。そこには、日本では失われてしまった大家族の強い絆がある。

ふと、ドラえもんのごっこでもドアを思った。

人生はなにが起るかわからない、八十歳を過ぎても。

### 海外で死を迎えるということ

マニラ郊外に、「エリジウム（楽園）」の名を冠した富裕層向けの住宅地がある。そこを管理するコンセプト・アンド・システムズ・デベロップメント社の野呂和夫会長（七十一歳）は、しかし、途方に暮れていた。二〇〇九年三月、単身で入居していた日本人男性が脳梗塞で昏睡状態に陥ってしまったのだ。

野呂会長は日本で住宅建築設備などを幅広く手がけてきたが、自身が脳梗塞で倒れたことをきっかけに温暖なフィリピンに移住することを決意し、会社を整理してビジネスの拠点をマニラに移した。フィリピン人パートナーと

の共同事業で、外国人でも所有権の持てる不動産を開発しようと考えたの

善意だけが、英吉さんが大切に扱われる理由とはいえない。六十三歳まで勤勉に働いた英吉さんは、月額二十四万円かいた年金を日本国から受け取っている。大統領の月収が十二万円強のこの国で、それがどれだけの価値を持つかは言うまでもないだろう。

公一郎さんはフィリピンで定期収入があるわけではなく、幼い三人の子供たちの将来を思えば、資産運用だけで家族を養っていくのは難しい。妻の実家や親戚たちも、日本人に嫁いだ娘が自分たちを豊かにしてくれると信じて疑わない。

しかしこれは、金銭を目的に英吉さんの世話をしている、ということではない。婿の父親が病気になるたので面倒を見たら、いっしょに年金がついてきた。道端で倒れている哀れな老人を助けたら実はサンタクロースだった、というような話だ。

フィリピンに移住してから、英吉さんは車椅子なしで近所を散歩できるまで元気になった。日本で飲んでいたた

くさんの薬をすべて止めても体調はいたつてよく、このままなら百歳まで生きられると真顔で言う。インタビュのあいだも、孫たちがずっと英吉さんにまわりついていていた。

フィリピンで結婚した日本人男性が、高齢の親を呼び寄せるケースが増えている。そのとき受入れ側にとっていちばん望ましいのは、親を大切に扱い、楽しく長生きしてもらうことだ。そうすれば、大統領の給料を上回る年金が空から降ってくる。それでフィリピン経済も潤うのだから、愛情と損得勘定が見事に組み合わさって、三方一両得のような関係ができあがるのだ。

記念に、有川家の家族写真を撮った。息子夫婦と孫、メイドたちに囲まれて照れくさそうに笑う英吉さんの姿は、誰もがうらやむ理想の老後そのものだ。

板橋のアパートでたった一人で生きてきた老人がいま、異国の地で新しい家族とともに幸福に暮らしている。



だ。

フィリピンの法律では外国人は土地を所有することができないが、コンドミニアムなら四〇パーセントまでの区分所有権が外国人にも認められている。同社はこの制度を利用して、区分所有権のある住宅地（タウンハウス）をフィピンではじめて販売した。

所有権の持てる土地付一戸建ては、コンドミニアムにあきたらない外国人の人気を集めた。二〇〇二年に入居した山部誠さん（七十三歳）もその一人で、元気なときは野呂会長といっしょに釣りに行ったという。

最初に山部さんの異変に気づいたのは、隣家の住人だった。ふらふらするからと助けを求められ、病院に搬送したがそのまま意識を失った。ICU（集中治療室）に三週間入院したものの、これ以上の治療は意味がないとして自宅に戻された。

野呂会長は住み込みのメイドのほか、プライベートトナース四人を雇い、

も感じることなく、そのまま静かに死んでいく。だが家族が決断する以外、誰にもその権限はない。

Happy Birthdayの飾り付けの下で、山部さんの「死ねない」日常はまだまだ続く。

\*

「人類史上未曾有」の高齢化社会がよいよ現実となって、誰もが人生の最後に強い不安を感じている。高齢になればなるほど、健康状態や経済状況など一人ひとりの違いは大きくなる。だ

二交代で二十四時間看護ができる態勢をつくった。医師に週一回の往診を依頼し、介護ベッドや酸素吸入器、栄養補給のための経鼻チューブなど必要なものはすべて揃えた。

山部さんが横たわるベッドの壁には、カラフルな文字で「Happy Birthday」の飾り付けがされていて、孫とおぼしき赤ちゃんの写真が貼ってある。しかし山部さんの目は大きく見開かれたままで、まばたきをすることほとんどない。

看護師たちは山部さんを「ダディ」と呼び、実の父親に対するような献身的な世話を続けている。吸痰や排泄物の処理はもちろんのこと、寝たきりになって一年半がたっても、床ずれひとつできていないという。

こうして、山部さんは死ぬことができなくなった。

日本から二度ほど、これまで疎遠にしていた娘さんがやってきたが、手厚い介護に安心し、「よろしくお願いします」と頭を下げて帰っていった。

から一概に、高齢者が海外で暮らすことが素晴らしいとか、悲惨だとかいうことはできない。

在宅での看とりやホスピスの拡充が叫ばれても、いまだに日本人の八割は病院から葬儀場に運ばれていく。私たちにはもうすこし、死の選択肢があってもいい。

けっきょく、ひとはいろいろな場所で死んでいく。それがフィピンであったとしても、なんの不思議もない。

（文中、一部仮名）

現在は、山部さんの預金通帳は会社が管理し、銀行員立会いのもとで月額十五万ペソ（約三十万円）の介護費用を引き出している（そこには、月額二万五千ペソ約五万円の管理費も含まれている）。山部さんの口座の残高は約四百万円、お金が尽きるまであと一年とすこしだ。

「エリジウムはたんなる売りっぱなしの住宅ではなく、住人のライフケアも含めたサトビスを提供したいと考えています。それで山部さんのお世話をしているのですが、回復の可能性はまったくなく、正直、こんなことをして何になるのかという思いはあります」と、野呂会長は言う。

口座にお金がなくなったら、どうなるのだろう。

「そのときは、この家をいったん売ったことにして、賃貸に切り替えれば現金化できます。年金もいくらがあるようですし、日本には本人名義の不動産もあるようです……」

経鼻チューブを外せば、なんの苦痛